生徒といっしょに，先生方といっしょに，みんなといっしょに，

－障害のある教師に対する教師，生徒の意識調査から－

三戸 学[1)]　寺島 薫[2)]

筆者が勤務している地区の教職員組合員の教師と，授業を担当した中学生(以下，生徒)に，障害のある教師(以下，障害者教師)をどのように受け止めているか，アンケート形式の意識調査を実施した。生徒へのアンケート調査から，障害者教師が身近にいると，教育的な意味合いは大きく，教育的効果はあることが把握できた。一方，教師へのアンケート調査から，障害者教師と共に働くことに共感しつつも，余裕のない職場環境の中では，意識の及ばない現状が把握できた。

インクルーシヴ教育，障害者教師，採用，雇用，生徒の意識，教師の意識

１．はじめに

各都道府県教育委員会の障害者法定雇用率は2.00%に対して，秋田県教育委員会の障害者法定雇用率は1.18%の状況である。秋田県教育委員会が障害者雇用促進法に基づいて策定した障害者採用計画(H18～H20)の進ちょく状況は，おもわしくなく，昨年10月末に秋田県を含む38都道府県教育委員会が厚生労働省から適正実施勧告を受けた。

障害者教師の採用が進まない大きな要因として，教員免許を持っている障害者が少ないことを挙げられる。また，秋田県教委で障害者特別選考を実施しているが，採用増につながっていない。

これらの現状を踏まえて，本稿では，脳性マヒである筆者が授業を担当した生徒と，本荘由利地区の教師にアンケート調査を実施し，障害者教師をどのような意識で受け止めているか把握することを目的とした。

２．生徒へのアンケート

アンケートの対象者は平成19年度,筆者が数学の授業を担当した2年生2クラス(64名)，1年生1クラス(29名)，時期は年度末に実施した。調査内容は筆者の数学の授業を受け，授業を受ける前と受けた後での生徒の意識の変化を調べた。

３．生徒へのアンケート結果

(１)筆者を初めて見たときに感じたことや印象の１年間の授業を通しての変化の有無[表１]

変化ありと回答した生徒が3分の2おり，1年間の関わりが意識を変えることがわかった。具体的な内容は以下の通りである。

表１．筆者へ感じたことや印象の変化の有無

	変化あり	どちらとも言えない	変化なし
２年生(N=33)	63.6%	12.1%	24.2%
２年生(N=31)	60.6%	6.5%	32.3%
１年生(N=29)	75.9%	13.8%	10.3%

＜変化ありの記述＞

・「初めは授業分かるかなぁ…遅れないかなぁ…」とか思っていたが，分からないところは丁寧に教えてくれたし，図などを使っていて，すごく丁寧な授業だった。

・「本当に教えられるのか？」と多少抵抗はあったが，授業をやったら普通になった。

・初対面の時よりも慣れてきて，馴染みやすくなった。障害なんて関係ないと思った

・障害者に対して，今までと見る目が変わった

＜変化なしの記述＞

・先生は先生だから…障害なんて，全然気にしていない

(２)障害のある筆者の授業を受けて，障害者への見方が変化したか[表２]

この質問では筆者を通して障害者一般に対する意識の変化を聞いたが，60人程度の生徒が「見方が変わった」と回答した。具体的な内容は以下の通りである。

＜変化ありの記述＞

・初めは身体障害者という存在に偏見があったので，接し方に困っていたけど，先生とふれあって

1)会員：由利本荘市立本荘東中学校
2)会員：(株)アークポイント

いくうちに，卓球や勉強に一生懸命にとしくんでいることを知ったので，偏見がなくなった
・障害があっても普通に話したり，授業をしたりすることができるから
・障害があってもなくても，人は平等だということが分かった
・町で見かけても，何とも思わなくなった。普通の人と同じように接する大切さを知った
＜変化なしの記述＞
・同じ人間として見ていたし，障害者という形でみていなかったから
・何回も障害者と関わっているので，変わらない
・大変だと思う気持ちが変わらないから

（３）筆者の姿から学んだことの有無［表３］

この質問では障害だけでなく，筆者の個性にも左右されるためか，「ある」「ない」にばらつきがあった。

＜ある の記述＞
・やればできるという強い言葉を先生から学んだ
・初めから諦める道を選ばないということ
・できないと思わないこと
・努力は大切だということ
・個性は一人一人あるのから，それをどんな形でもいいから活かす
・もっと自分にできることをやらなきゃいけないなぁと思った
・自信をもって生きることの大切さを知った
＜ない の記述＞
・あまり興味がなかった
・自分と違ったから

４．生徒へのアンケートの考察

（１）筆者へ感じたことや印象の変化の有無

記述の中では「障害のある人に授業ができるのか？」という率直な意識が語られ，授業を通して，生徒の変容を見て取れた。他に，筆者とのコミュニケーションを通して，障害に対する偏見や誤解や無知が解けていった様子が分かる意見や，障害のある人に対する意識の変化を自覚した様子が伺え，筆者を通して，より一般的な社会的な視点からの意識の変化があったと考えられる。しかし，障害の有無に左右されることなく筆者個人を見て，接している生徒もいた。

（２）障害者への見方の変化の有無

授業を通して，生徒の障害者への認識を見てとれ，「筆者個人」から「障害者一般へ広がりのある視点」をもつ生徒もいた。しかし，自由記述 19 件中 12 件と，ほとんどが筆者個人に起因するものであり，授業を通しての障害者への理解と認識の深まりに広げていくためには，授業を通してだけではなく，“福祉講話”など，他の関わりや働きかけが必要ではないかと考えられる。尚，筆者が勤務する学校にはエレベータが整備されており，環境整備に関する指摘はなかった。

表２．障害者への見方の変化の有無

	変化あり	どちらとも言えない	変化なし
２年生 (N=33)	60.6%	12.1%	27.3%
２年生 (N=31)	54.8%	25.8%	19.4%
１年生 (N=29)	69.0%	17.2%	13.8%

表３．筆者の姿から学んだことの有無

	ある	どちらとも言えない	ない
２年生 (N=33)	57.6%	15.2%	27.3%
２年生 (N=31)	90.3%	9.7%	0.0%
１年生 (N=29)	86.2%	10.3%	3.4%

（３）筆者の姿から学んだことの有無

生徒の記述から筆者の姿を通して，生徒は《努力・がんばり・自信》などの感情が芽生えていることが分かった。また，筆者の姿を生徒自身と照らし合わせて考えている記述も見られ，これは障害者教師の１つの指導力と思われる。また，《努力・がんばり…》など，抽象的な感想から，具体的で主体的な意志を表明する生徒もいた。人の生き方から，自分の生き方を捉え直す，参考にする視点が芽生えた生徒もいたが，多くは成長を待たなければならないと思われた。

５．教師へのアンケート

アンケートの対象者は秋田県教職員組合本荘由利支部の教師，調査時期は平成 20 年 5 月下旬に実施した。アンケートの回収率は 40.0%である（配布数 160 通，有効回収数 64 通）。調査内容は障害者教師についての意識の違いについて調べた。また，教職歴別・障害者との交流の有無・障害児への指導経験の有無・障害者教師と同僚経験の有無にそれぞれ分類した。

６．教師へのアンケート結果

（１）回答者の内訳

教職歴が 1～5 年，31 年以上と回答した人がそれぞれ 2 名，26～30 年と回答した人が 8 名，6～10 年，11～15 年，16～20 年，21～25 年と回答した人がそれぞれ 10～14 名である。また，小学校教師が 38 名，中学校教師が 26 名である。

（２）障害者が教師になることについて［図１］

障害者と交流経験，障害児への指導経験のある教師がより肯定的な意見が多い。また，障害のある教師との同僚経験のある教師は肯定的な意見が少ないことが分かる。教職歴で比較すると，経験のあるベテラン教師ほど肯定的な意見が減少する傾向にある。具体的な意見として，「特別枠は歓迎」と現在の施策を支持する意見，肯定的な「一定の指導技術と人間性があれば問題ない」の意見がある一方，否定的な「子どもの命を守るという責任がある仕事では，ふさわしくないと考えています」などの意見があげられた。

（３）障害のある教師と同じ学校で働くこと［図２］

いずれも積極的な意見は少なく，肯定的意見と否定的意見が概ね 3 分の 1 で拮抗しており，否定的な意見が顕在化している。具体的な意見として，「市教育委員会や校長の理解，周りの職員の協力は必要」など，同僚との協力体制や教師の加配を指摘する意見があげられた。また，「現校舎では不可能」など，ハード面での問題を指摘する意見もあげられた。

教職歴で比較すると，経験のあるベテラン教師ほど否定的な意見が多い。障害者教師と同僚経験がある教師は，同僚経験のない教師よりも肯定的な意見が少なかった。同僚経験のある教師は，「生徒だけでなく，教諭に対しても様々な配慮が増えて大変である」と意見を述べている。

（４）障害のある教師が子どもに与える影響［図３］

経験のあるベテラン教師ほど否定的な意見が多くなる傾向はあるが，肯定的な意見として「思いやりの心も育つであろうし，偏見もなくなると思う」や「努力する姿を，その姿勢を見せてあげられる」との意見が多くあげられた。しかし，「授業に支障があれば，好ましくないと思います」や「障害に対する考え方が深まる点については好ましく思うが，他の面との弊害を照らし合わせると，そのメリットが薄れるのはないかと思う」との意見もあげられた。また，「障害があるなしでなく，人間性によると思う。子どもたちがしっかりと受け入れる態勢を周りで作っておかなければならない」など，子どもに与える影響に障害の有無は関係ないと指摘する意見や，「障害の内容，程度，地域性により異なり，一概に述べることはできない」などの意見もあげられた。

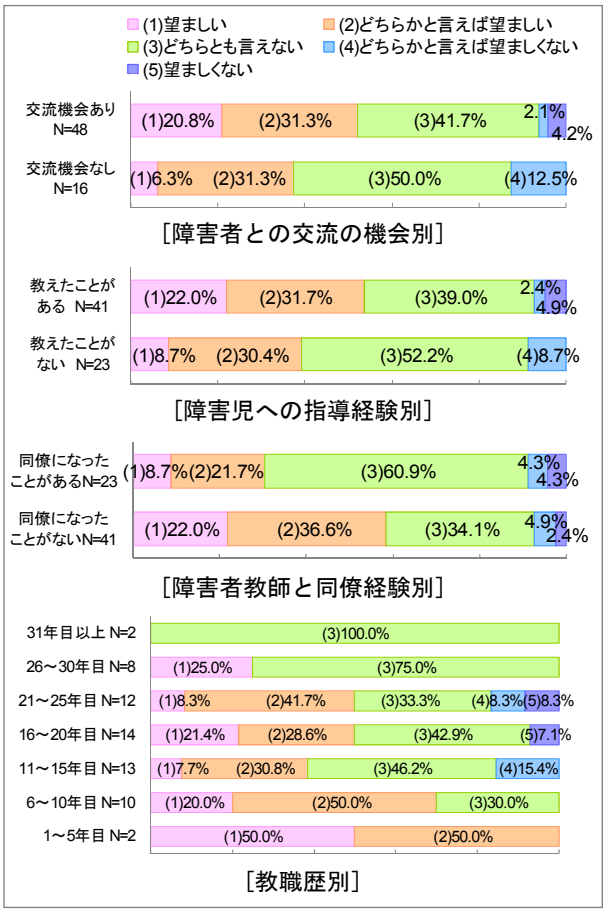

図１．障害者が教師になることについて

７．教師へのアンケートの考察

（１）障害者が教師になることについて

障害のある人が教師になることについて約半数弱は肯定的に捉えている。否定的な教師は少ない。“助け合い，思いやり”を子どもへ教える立場の教師であれば，“共生社会”を肯定的に受け止めるはずである。“共生社会”は，一般論的で総論的な理解でなく，具体的で実践的な取り組みである。一般的に，障害者と関わる機会があればあるほど，障害者への理解は深まる。その認識と実際に教師の仕事をしているがゆえ，現実とのギャップに苦悩する教師の姿が，障害者教師と同僚経験のある教師の割合が低いことから推察できる。

障害者法定雇用率の実施勧告と同時に，厚生労働省をはじめとする関係機関は，“共生社会”への理解を促す取り組みも必要である。

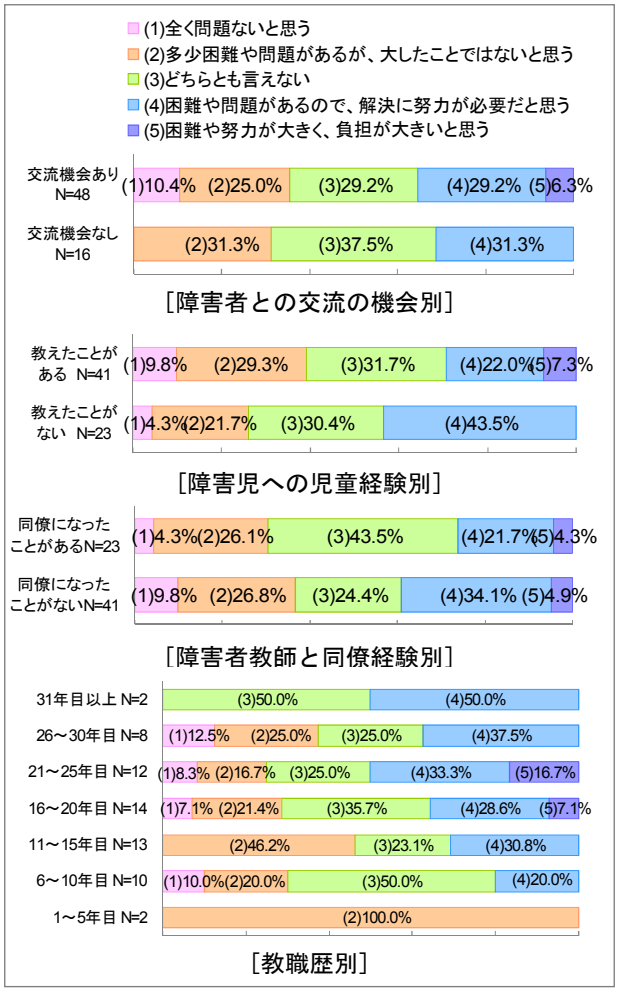

図２．障害者教師と同じ学校で働くことについて

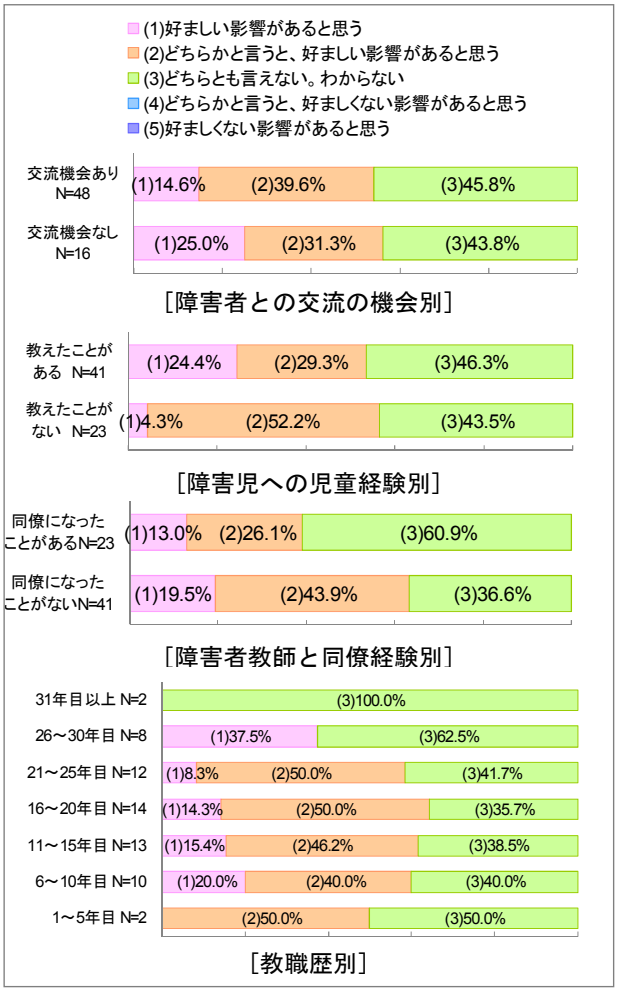

図３．障害者教師が子どもに与える影響について

（２）障害者教師と同じ学校で働くこと

約３分の１の教師が否定的であった。自分が支援する負担を考えると，一緒に働くことの大変さが強調され，否定的な意識があるようだ。その意識を軽減していくために，施設面の整備を含め，障害者教師の支援体制が必要である。その前提として，同僚同士がコミュニケーションを取り合い，助け合って働く職場の雰囲気作りが大切であると考える。また，今後の社会状況を考慮すると，障害者教師と働く場面が増えてくると思われ，教師一人一人の意識の変化も求められる。

（３）障害者教師が子どもに与える影響

（１）と（２）の肯定的な意見の割合が高いほど，この設問の割合が高いと考えていた。また，障害児への指導を含め障害者との交流経験の有無と，この設問の相関関係が見られなかった。障害者との交流を通して，教師自らの変容体験が大切と考えていたが，体験者の肯定的な意見は低下し，一般的な知識として捉えていることが把握できた。障害者教師を活かした子どもへの教育的な効果を考慮に入れた具体的な実践の提起が必要と考える。

８．今後の課題

国の政策により，今後は障害者教師の採用は進むであろう。それには，本調査が示しているように，障害者教師の労働環境の整備，教師の多忙感を軽減する取り組み，一緒に働く教師に“共に働くこと”の意識を促す啓発活動が不可欠である。また，単に障害者法定雇用率の達成を目的化するのでなく，どのような教育環境を創造していくか，議論をして，共通理解を図る必要を感じる。障害者教師の採用は雇用問題であると同時に，教育の課題でもあると認識している。

筆者は，いろいろな教育的なニーズをもっている子どもが一緒に学ぶインクルーシヴ教育を支持する。多様な教師集団であることも，インクルーシヴ教育の具体化の１つである。筆者は障害者教師の採用をインクルーシヴ教育の具現化に発展させていきたいと考えている。

［謝辞］
アンケートに協力頂いた秋田県教職員組合本荘由利支部，アンケートの集計に協力を頂いた（株）アークポイントの平山清美様にお礼申し上げます。